# 第　2　部

砂上の楼閣を崩すことはたやすいものであるが、雨降って痔が痛いというように、砂上の楼閣も雨によって固められると意外に強固に踏ん張っているものである。昭和62年に10周年を迎え、第20回の記念すべき演奏会で小編成ながらブラームスの第１交響曲を演奏したディマンシュは、その５年後には、結成15周年にして、ついに悲願の"悲愴交響曲"を演奏するに至ったのである。

この15年間、とりわけ近年５年間の道程（みちのり）は、決して平穏無事なものではなく、埼玉の田圃の畦道のように時には途切れ、時には泥まみれになり、そして冬には乾燥してこちんこちんに固まってしまうような険しいものであった。

第20回の演奏会は、10周年記念ということで通常よりも大きい編成でやろうとしたが、こういう時に限って"出られない"と言い出す人間がいるのが世の常である。入社後数年経過すると、特にインターナショナルな企業では、将来を嘱望される若きエリート達が海外研修とか海外勤務と称して１～３年の海外漫遊を命ぜられることがある。この時はディマンシュの中に、何故かこのような"若きエリート達"が集中する時期であった。こうなると、ディマンシュのような３Ｋの零細企業は、途端に人手不足になってしまうのである。これが俗に言う"ディマンシュ第２次人材確保難"であり、過去に活躍した"青田刈りチーム"が復活し、代替要員の確保に東奔西走することとなるが、この血の滲むような努力の結果、総勢63名（弦楽器：10・10・10・７・５人の編成）とディマンシュ始まって以来の人数を確保でき、何とか演奏会に漕ぎ着けることができたのである。

第22回（昭和63年１月）は、チャイコフスキーのバレエ組曲"くるみ割り人形"がメインの演奏会であったが、チャイコフスキーが正式のプログラムとして登場したのは、これが初めてであり、この後、第27回で"白鳥の湖"を、第28回では交響曲第１番（冬の日の幻想）をプログラムで取り上げていくが、実は、着々と第30回の"悲愴交響曲"の準備を進めていたのである。また、この時は、身重のおなかを抱えながら演奏会に参加した責任感の強い２人の女性がいたことも忘れてはならない。"母は強し"か。

第24回（平成元年１月）は、人材不足の時期に追い討ちをかけるように、弦楽器のトップ２名のほか主要メンバー数名を欠く演奏会となってしまった。ディマンシュのメンバーと関係の深い某オーケストラと演奏会の日程が重なってしまったのが主たる原因であるが、奇しくもそのメンバー達は、両オーケストラを天秤にかけ、そのオーケストラを選んだのである。（あちらの方が若い女性が多いから当然か？ヴァイオリンのＥ氏などはそのまま不帰の人となり、そのオーケストラで２nd ヴァイオリンのトップにまで昇進した上、細君まで見つけたのだから人生分からない。）その上、わざわざ新婚旅行をその日に当てるといういい加減なトップまで現れたのである。このような状況から、第４回以来の主要メンバーを欠く演奏会となったこの演奏会は、第４回と同様に正式には認知されておらず、永久欠番の"幻の演奏会"となっている。どうも４の付く回の演奏会には、因縁めいたものがあるようだ。この演奏会はオールモーツァルトプログラムであったこともあって、結果は惨憺たるものであった（らしい）。しかし、この暗い話題の多い中で唯一の朗報は、トップを欠いた某内声の弦楽器パートで、トップの偉大さを改めて認識するよい機会となったことである。いなくなって初めてわかる親の恩というとこか。

続く第25回では、オーボエのソリストを迎え、Ｒ．シュトラウスのオーボエ協奏曲を演奏したが、協奏曲をプログラムで取り上げたのは、第13回（昭和58年９月）のモーツァルトのピアノ協奏曲変ロ長調以来、実に６年ぶりのことであった。

また、この回から主要メンバーも復活し、海外へ派遣されていた企業兵士達も帰国し、ディマンシュも表面的には以前の活気を取り戻したかに見えた。しかし、この頃からディマンシュの行く手に目に見えない新たな"壁"が出現する。それは"家庭"という名の"壁"である。メンバーの多くは結婚して家庭を持つ年頃に達していた。こうなると難しくなるのが、家庭と趣味との両立である。ディマンシュのようなアマチュアのオケは、家庭の"協力"と多少の"犠牲"無くしては到底成立し得ないものであるが、メンバーの中には、家庭優先の原則から次第に練習から遠ざかり、遂には、奥方に反対されて泣く泣く演奏会を諦める者が出てきた。その上、第24回演奏会の失敗を契機に、旧ソ連邦で燻っていた民族問題のように、ディマンシュ内部に亀裂が生じ始めていたのだ。

長くつき合っているとどうしても演奏上の問題での意見の対立などで人間関係の悪化が生じるものである。この時は、この"民族問題"が各地で噴出し始めたのであった。このような状況の中、10数年も棒に、ではなかった、棒を振り続けている指揮者も、グラスノスチによって表面化し、一触即発の状態であった"民族問題"を解決できず、複雑な外交関係に嫌気がさして、ディマンシュを辞めたいと言い出すようになった。もちろん彼の場合、理由はこれだけではなく、個人的な問題もあったようだ。埼玉の田舎に引っ込んだため都会に出てくるのが億劫になったこと、御多分に洩れず、泣く子と奥方には勝てなくなったことなどが原因であったらしい。あの出席率がディマンシュで一番良く（当然か）、飲むために練習に来ているような呑ん兵衛指揮者が、練習が終わると酒も飲まずに帰宅をするようになり、練習には遅れるようになり、ついには最低の出席率を誇ることとなり、更には、自分で作っておきながら、人を騙して？誘っておきながら、ディマンシュを辞めたいと言い出すとは。ディマンシュは決して指揮者一人の所有物ではないが、この指揮者が要となって一つにまとまっていることも否めない（ヨイショ!）。この指揮者は、ディマンシュの指揮者であると同時に、生みの親であり、責任者であり、かつ、最も重要なことに「雑用係」であったから、この指揮者が辞めることの影響は測り知れない。この指揮者が辞めるということは、ゴルバチョフが辞任するようなもので、ここにディマンシュ史上類を見ない"ディ連邦崩壊の危機"が訪れるのである。このような未曾有の危機を乗り越えることができたのは、彼の周りにいてディマンシュをこよなく愛している人々の尽力のお陰であった。指揮者に付き合っていつも愚痴を聞いているこのオケの大目付と言われている人物の虎の子を崖から突き落とすような説得、コンサートマスターほか数名の熱意ある励まし、そして内助の功と言おうか、何よりも寛大なる奥方の温かいお言葉と協力に支えられ、この指揮者はマーラーの第２交響曲のように、再び指揮台に姿を現すこととなる。（あまり練習には出なくなったけど……。）こうして今世紀最大の出来事とも言えるソ連邦の崩壊のように、消滅するかのように見えたディマンシュではあったが、意外にしぶとく、その危機を乗り越え、大魔神のように蘇ったのである。

第27回演奏会では、シューベルトの曲をメインにしたら金を払わないという我が儘なＳ氏の反対を押し切って、"グレイト交響曲"とかいう長蛇な曲をメインとしたが、この時、シューベルトの音楽が如何にださく、疲れるだけで演奏する価値がないものであるかを身を持って体験できたことは、よい経験であったと言えるかもしれない。この演奏会以来、一部の熱烈なシューベルティアン（崇拝者）を除き、誰も２度とシューベルトの音楽をやりたいとは口にしなくなった。第28回のメインは前述のとおりチャイコフスキーの"冬の日の幻想"であったが、この時は、中プロに語りストを迎えてプロコフィエフの音楽物語"ピーターと狼"を演奏し、聴衆の中に最近めっきり増えた小さなお子様へのサービスにも努めた。

こうして、年に２つの節目を刻みつつ、ディマンシュは30回めの演奏会を迎えるわけであるが、一口に30回といっても、アマチュアのオケが、確たる組織もなく30回も演奏会を続けることは、並大抵のことではない。15年と言えば、産声をあげたばかりの赤ん坊が中学３年生になり、中学３年生だった子供が三十路を迎えるのだから……。アマチュアオケの多くは、努力の甲斐なく自然に消滅していくのが現状である。ただ、その裏には、練習場所の確保や金勘定など、涙無くしては語れない裏方の血の滲むような努力と苦労と犠牲があってこそ成り立っているということを忘れてはならない。華やかなスポットライトの裏には、必ず陰になって働いている、オケの楽器に例えればヴィオラのような人々がいるのである。また、栃木の山麓や茨城の田園地帯に居を構えながらも、特急列車に乗って１日がかりで練習に参加している奇特な人達（もう少し練習に出席すれば言うことないのだが……。）や、子供を床に転がして練習に参加している熱心な夫婦もいることを付け加えておこう。

さて、このような問題山積みの混沌とした状況の中、ディマンシュは、第40回、第50回と駒を進めることができるだろうか。

まあ、とりあえず、"悲愴交響曲"が"悲惨交響曲"とならないように頑張ろう。